平成二十九年度　道伝えの日　お月見歌会　入選歌

課題歌「月」

［一　席］

一五、代掻きの濁りおさまり宵の田に月影うつる明日（あした）は田植　　井上　文生

［二　席］

二六、麻痺したる左手を撫で聴き入りぬいつか弾きたし「月光ソナタ」　　片岡　和代

［三　席］

三一、マヨールの広場に照る月とんがりて異国の風は鋭角に吹く　　和田　操

［選者推薦］

二六、麻痺したる左手を撫で聴き入りぬいつか弾きたし「月光ソナタ」　　片岡　和代

麻痺した手ではピアノが弾けないのだが、作者は「月光」の演奏に聞き入っている。そうした現実の中で、いつかその曲を弾きたいと願う作者の姿に共感する。

三一、マヨールの広場に照る月とんがりて異国の風は鋭角に吹く　　和田　操

フランス辺りの都市の広場と三日月と風をテーマにした絵画的な歌。きわめてユニークなのは、写実的な世界を突き抜けて幻想的な夜の世界を現出しているところ。月の「とんがり」と風の「鋭角に吹く」が響きあう。

自由歌

［一　席］

二六、また一つ更地になりてまた一つこの地の記憶おぼろになりぬ　　片岡　和代

［二　席］

一六、弓を持ち袴穿きたる男子（おのこ）乗りきりりとなりぬ各駅停車　　西　春彦

［三　席］

二八、余命知り綺麗に生きたる友のあり梅雨晴れの朝くちなし匂う　　小林　久子

三六、杖をつきゆつくり歩む人のあり駆け回る子あり午後の公園　　広瀬　亮子

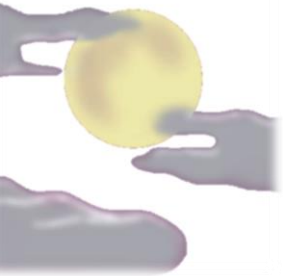
［選者推薦］

六、添乗員がひとりふたりと数へれど時間守らぬいつもの彼女　　橋本　隆司

評者も何時間もかかって高山へバスで辿りつく。その間に三、四ヶ所で休憩タイムがある。十分くらいだが、そこに決まって遅刻する人がいるというのだ。いかにもありそうな光景。批判というよりもユーモアがある。

三一、権兵衛に地蔵長嶺美女といふ峠を越へて飛騨へと帰る　　和田　操

他の地方から飛騨に入るにはいくつもの峠がある。一首の中にその峠の名を四つも入れて、窮屈にならず却って牧歌的、暢びやかな世界が描かれている。



平成二十八年度　道伝えの日　お月見歌会　入選歌

［飛騨神岡高校］　入　選

十六夜に照らされていた五線譜はマーラーの交響曲のように　二年　濵本（はまもと）蔵人（くらと）

三日月のような温もり感じたく冷えきった指をそっと握る　一年　清水（しみず）千聖（ちさと）

三日月の勾玉の穴見つけたり望遠鏡のレンズを締めて　一年　古田（ふるた）雅人（まさと）

満月を見て思い出す幼きころ一緒に見上げた祖父の肩車　一年　堀内（ほりうち）夏生（なつき）

神岡のお城のほとりを流れゆく青胡桃のごとき十六夜の月　一年　尾上（おのうえ）あさがお

億千のきらめく星のただ中に月は天心アルプスの空　一年　高原（たかはら）華子（かこ）

［吉城高校］　入　選

思い出す空に輝く満月に私が生まれた日のエピソード　一年　大森（おおもり）玲衣（れい）

稜線が大きく見える月白に今日の月待つ祖父は窓辺に　一年　水口（みずぐち）可奈子（かなこ）

天窓の月の光に誘われて芝生に転がるほわほわ散歩　一年　駒屋（こまや）めぐみ

十六夜や少し欠けてるその形まるで私の姿のようだ　一年　北村（きたむら）沙由里（さゆり）